



磐水先生隨筆目錄

卷之一 留塾漫筆

卷之二 徹桑錄

卷之三 瓊浦紀行

卷之四 寄奇次第上

卷之五 同中

卷之六 同下

卷之七 興行日記

卷之八 菟伎能片枝

卷之九 櫛蔭釋志

卷之十 澗菴漫錄上

卷之十一 同下 八荒錄異



卷之十二 北牖医話 雜記 兩陰異稱

卷之十三 尋夢高隨筆

卷之十四 銷夏筆記

霜降月記 比丘形医傳
有暇の記 金華真金雜記
東奥地名私考 還命笑記

卷之十五 消遣隨筆

卷之十六 同

卷之十七 珠樹園漫筆

卷之十八 珠樹園日涉

卷之十九 磐箱日涉

卷之二十 同事異言

磐石先生隨筆

○留塾漫筆初編 安永七年改

安永中播州須磨比浦より澳人の網をたき金の甲
を引りてを金と澳人と言ふなり 文盲の事あるは其の
習字の拙なるを何物かんと尋ねるは留塾の
所見の甲の内は新中納言平知春と彫付く
何れに在る金指をたきしは是れ永正馬子園の
大書に献せし御海賣万石所錫屋しと記ら
しき物也 何れに在る物に記すは其の
歸り山也 社友若君を贈りし
和蘭の解体をたきしと記すは其の
軟

骨の有りたるは能長す能長を此を稍剛骨と有り
と有り 若州の藤守田川 平を名付ししを物と魚
類とては軟骨の者能生長すと海新魚或は
鯉或は鯉の類ありと蘭花カラカベ云々
骨脆軟ししからりたりくと岸の物を噬食
の類ありとベンデレン記の略記あり

○ 虫被物類を感有る 蚯蚓の夜暗といふあり
性柔伊集本在度有るを市用有り 蚯蚓と蟻
と類有るをあられしあり 何れも 蟻を下を
蚯蚓の甲を灰末付の糸喰たりしり世に云 蚯蚓の
骨は此を蚯蚓の骨といふは蚯蚓を何れも蟻
類ありと見しし心しく伊集本も試みたり

○ 和蘭ヨンストンスの禽獸誘ふ人魚の形状より胸
州「おが」といふ湖は若くし時として人魚出ると程人
或神杯ニハ舟の更艶ある女の顔とてありと云れと
尾の真成り切く出たりといふ田中助の若く
図画しと奪せきと鳩溪先生の物語は是
七の蘭人の人を欺ざらむとあるを記し 其の事
信ふるは物ありと見たり

○ 蝦後新活の浦新活と有りといふ事ありと浦人何ハ
びをたりと出たりと折く一角を七敵の赤き怪
物活なりと活出たりといふ 蝦浦人何通の事
りしと通たりと日月を送りしと云々

らざらんともく 獵人を斬る鉄炮もく 打元ともく
打連れりともく 見たりともく 獵人只此才をきりともく
元ともく 山脈を才を買ともく 仙居都下は 持たりともく
麒麟の首ありともく 見たりともく 物ありともく 石を投る
鷹中 江都 持ありともく 角ありともく 先生も抱く
石を見たりともく 一才四寸五分長さ 己の
三尺の何年ともく 石の形状を 獲得するともく 所謂水
犀 見たりともく 持ありともく 本邦より 獲るると見たりともく
り 奇怪の物ありともく 先生の物 獲りともく

○蘭人容思東思著ス所禽獸譜ニイニチン^{印度}シケハ一ニ
ト云者其圖其餘ヲ讀ニ去那ニ所謂聖代表現ナル所
ノ鳳鳥ナリ多ク印度ニ産シ印度亞雜ト云者ナリ矣

茂實再按
鳳鳥ハ赤
道之下熱
帶之國所
産一種ノ
雞也下突
レバ支那
正帯ノ國
不産ト明
矣

レバ彼地ニハ多ク産ナル物ナリトミヘタリ 聖代出ル
モノナリト云ハ左ニアラズ 聖代ノ德化海外迄ヲヨビ
南越ヨリ何カ方物ヲ獻シ崑崙ノ竹ヲ獻シテ竹ヲ
製セラレシテ云々如ク其頃海外ノ民鳳凰ヲ獻シ又
ル^ルトナシカ故ニ奉儀杯ト云鳥ノ出タルニ奉儀トハ
イカサル筈ナリ此聖王ノ思化四方ニ及ニテ蛮人奉
儀ノコレヲ獻シタル物ナラン手ト思ハルナリ又按ニ神
輿ノ上ニツケル鳥ヲ此方フト云何レノ由緒ナルカ
知ラス按スルニ蘭書中ニ鳳鳥又 鳳鳥ホリケルトアリ
風鳥鳳トハ相違ノ者ナルカ如何ナルユヘカ知此書々
ルカ詳ナラズ思ニ鳳凰ノ字凡ニ从ヒ又凡ハ佛國
ヨリ来ルモノ故輿ノカシラニモツケルナラン手ナセ

ナレバ其鳥ヲフト云ハハナリ又按ニ雄ヲ蘭語 *haen*
 雌ヲ *haen* ト云夫那ニテ鳳ヲ雄トシ凰ヲ雌トス鳳華音
 オシ凰華音ワレ恐クハ蘭ノ *haen* *haen* 轉セルカト思
 ヲル也中川先生鳳鳥ノ條ヲ翻譯シ且其說所ヲ以テ
 禽獸譜ノ圖ヲ大ニメ知所說之采ヲ彩色シテ楠木雪
 後ト云フ者ヲ画セシメテ先生ノ家藏ニアリ形状甚奇
 愛玩スベキノ文采ナリ賛アリ別ニ翻譯ノ書アリ詳
 ナリ以上中川攀師先生ノ說真ニ奇談ナリ未タ和漢
 ノ人ノ知ラザル所ナリ鳳鳥ノ聖代ヨリ外出テザル事
 ト和漢ノ人教千年未一定シテヲキタリシニ彼國コ
 レヲ産スルヲ見出シタルモ其當代昇平ノ大化ナリ
 吁嗟感戴スベキカナ

○狐と云獸を方百里の陸ツキの國は非まば恒ず後
 世知も狐あり故は狐は穢多るも初きり狸も悉
 此より事多し物も世國も大神と云物多し又
 何多の七塔も穢ハ牛と羊ナリ知かし物多し
 邪魅も悉し邪祟病あり土民天狗は皆これた
 タと云皆何の獸ありと發ルハ野狐は限らむ一
 つの邪魅も悉し何國も邪祟病も有るをみ
 へしと先生の古物也

○蘭人 本邦の東の船中ニツの奇花の有り何を見
 とも西洋の三異ト云ハイスタラセ故の内ニ此らの
 嶺より何の山頂に跨る左なる大なる金銀も有り
 右跨る右の山頂に蘭形鳥を接するハ蘭形鳥也
 本邦の奇鳥也

此の腹をせよ 是女一あり又イタリヤースの肉欲
の奇怪の言ありて長壽寺に敷定りて五七何事
とやりか此の死をわたりて其報極の時とあつて
イ子乾の香林縣を二人集め夫は火を切ちお中
の身と殺して死ありてその灰の肉自持と一衆を生
む生衆又生長しておの路の言を變りありて是女
二あり又一里才の言は作りて其を大堂塔あり
是女三ありて蘭人の物種とせしと老雄長の叫び
同人十八歳の市は物種を重人の種とせしと高分依
めつともありて虚花ありてとて却て加しめしと片先
を思ふる重人天地の大何の言をあらはし其の
況をせし物せしとありて一笑を解きりて其の事

若き時多しと 擬物として慚愧してと叫びしは
事職方外記ととありて出づるなり 可参考
○在昔同光抄平伊多言及出火のとき其一家士母を
ぬりと伺き 蘇士五何人むを為せし由はます
何と答へし是を出入り同席危言出仕ありて
切られぬるときに此の言を海下何多言蘇士能
言うて是を不く悔し斯く差へて急卒あり
去き中人蘇士返答は否答傳ありては時代
の人物を後存る傑雋ありて感嘆をたらしめ
たり

○和蘭都の内は大学校ありて此一月を三才の年
日ありて毎層都人士を其集め玉敷に提筆

夕折といや解く阿日嘉祿何ぞと花女抱ひた
は大金と流るや解く阿日大量の大金如き比を
（く）阿きと是は分ちを色と吐きう）紀保國有と
いふ者、一代の内百万兩の身代を阿り上り又一代
の内は百万兩と金銀を流しひきく（さう）若衆
通ひく多くの金を費ふ也）日々の男は付くて
金とあきちあらをれ如くつらつらと一日思ひ付くて
去来姓阿馬道急する笠簾此等のを為す阿
人と出（一日は去る阿程元阿き阿ひさう）とそ
る阿は尋（又）大紫（赤）位賣阿をといふ阿（去）
或来程阿（く）何れ一日を去る阿（と）怖る阿
彼阿急（を）く阿の通（く）て止切阿（を）く一丁と

阿日赤阿日潤堂く（日）（と）せまきたり）（主）阿日抱ひ
く阿きと何人の日しか（日）さゆ阿阿の沈醉（を）き
（満）を阿（け）る（れ）うといふ阿（を）く（赤）阿（を）阿
居（る）（と）阿（日）（の）（赤）阿（は）（け）（く）（く）（い）（が）（是）（ゆ）（い）（と）（公）（安）
（を）阿（ひ）（け）（せ）（れ）（も）（を）（ま）（か）（し）（ゆ）（が）（は）（の）（勢）（も）（赤）
阿（と）（わ）（け）（も）（主）（角）（一）（折）（の）（赤）阿（は）（一）（丁）（野）（を）（て）（子）（也）
阿（指）（が）（せ）（し）（た）（也）（右）（の）（花）（と）（り）（也）（右）（の）（と）（先）
（と）（去）（る）（を）（知）（識）（江）（戸）（中）（大）（評）（判）（を）（り）（し）（と）（あ）
ん（）（や）（ら）（又）（右）（の）（如）（く）（）（あ）（た）（る）（の）（け）（り）（と）（そ）（の）（流）（く
（）（赤）（阿）（阿）（）（西）（番）（を）（掃）（納）（を）（掃）（納）（と）（く）（以）（智）（入）（覚
（の）（者）（何）（ぞ）（し）（た）（）（の）（思）（ひ）（付）（り）（は）（右）（阿）（阿）（の）（花）（を）（投

此川村のいふをまをし下代蔵の稲倉の祖を先
主より並うま九蔵。付き登るも在又後の地
主。此一未。下。い。る。在。何。れ。も。已。れ。う。ら。み。と
合。起。而。ま。り。何。日。而。分。り。何。り。を。と。ん。ん。い。つ。幸
此。ハ。家。の。北。堂。を。出。の。は。す。う。わ。く。い。つ。も。あ。る。六
早。く。祠。を。立。こ。ぬ。り。を。も。才。持。り。産。し。い。つ。此
虎。と。り。川。村。敵。こ。す。と。ゆ。り。さ。な。せ。母。産。こ。く
秋。の。和。屋。に。か。く。昔。ん。と。思。ひ。い。つ。み。い。つ。あ。ら。ん
子。を。物。作。り。し。り。在。才。あ。る。と。川。村。と。云。男。ハ。家。内
の。在。意。一。年。の。男。而。日。の。ち。た。及。此。在。の。男。而。と。ん
乃。燒。産。何。し。と。み。こ。母。け。け。は。く。く。昔。し。川。村。の
い。つ。も。在。り。在。り。ぬ。り。と。い。つ。者。た。き。と。一。簿

の書と読まれば、たそ稲倉を能く日法の何れも何れも
又何れとゆえ、名をさすといふ。不備の中分あり。とくうを中
つれも又おの何れ。中。の。新。字。を。名。れ。バ。何。れ。い。つ。り
不備の中男あり。此。子。産。こ。ぬ。り。産。さ。る。の。ま。う。こ。れ
ハ。尋。ぬ。未。記。り。と。い。つ。九。う。く。と。川。村。又。葉。内。志。を。り
ハ。在。川。村。を。名。れ。未。く。と。り。出。産。此。ハ。未。記。に。す
た。い。つ。も。通。元。の。も。は。め。り。ゆ。外。ら。り。み。と。い。つ。何。れ
只。一。つ。の。形。ひ。な。り。已。れ。り。名。字。在。位。を。志。す。も
ハ。在。来。未。記。の。自。力。ハ。及。び。何。れ。の。ま。う。世。産。を。と
何。れ。と。い。つ。水。を。西。一。條。ハ。子。つ。ま。ん。れ。り。と。い。つ。れ
新。字。を。り。川。村。と。い。つ。一。書。記。夫。志。き。の。ま。う。の。ハ
い。つ。も。在。り。何。れ。か。く。新。字。り。バ。立。者。何。れ。ん。の。且

○先年二三層と名都に相祀ある白蘭人カラシ又
持来れイキリスの都の島を見らるは口國の大
園也都の島中よ大河ありて大なる木橋あり
其欄干の両側よ以屋連房何里人の数を億
程ありといひ一里東都極大都會ありて人の数も
難あるやあり大元通計はる而貳百万も在らん
といひる是信の人數といふもあしうらぬなり

○徳教の教考州西尾の傳主三浦志摩を度ありし
時を領内よ一人の比丘尼十の輩位よりめ何處に
りりん新館し山家と度當を設け住居しと
十三年に來一向教館を辭し去るあ其の事
何事しともいふめ多くしらぬかゝ穀物といらざ

白百在男らの口をくく其代りは綿と名ひるひ
何れも本綿庄にけく本綿と云ふ人といはる其
の衣服をこしひをを括く山の上の館ありて
生席を全し身壯健ありしより其處の奇怪の
事いふ秋吉白先生少壯ありし時此處某の評に
子孫の傳わりくおきいられし三浦氏の傳あり
初生ありて海をり君侯より何れも何れも何れ
の所も此處民を尋られしより其のし此處の
実見平家子とやりと云人お尋ねく其傳あり
出逢しといひ口元ありて奇事ありて其の如く
ありしとありぬ有る所以ありて奇事ありて
是れを分く吐あを隔曉病あり管を与(述)く

曾方外の病状も何れと先生も由緒よく云ふ所
しよこの長ぬ何れ何れを引致しし見事なり
復しし—又村土行義と云ふ儒生も口病なり
是の諸部一々を詳と覚く一掃と云ふ一書あり
—何れこと云くしよと古人—何れ—又曾方
山藤松田東溪曾の一怪病を見しとは是の傳り
地川崎といふ所の百姓勝と云ふ風毒の如く濃
くく腹を痛む二水を糞糞を吐く軟弱—その
多病を存み—何れく—疹の如く左指針と施す
此の創口も—何れ—一玉を如く一瞬の如く
病の極の如く先を病し—と云ふ奇怪の
病あり—何れ—血を余程引く—何れ歟口

新し何れ—病状は如何に何れ—何れ
先也—何れ—又在昔中村式部左衛門
病を竹田法平療治せし此を—
癩瘡毎年—病状—一日痛甚—
物を閉め—何れ—法平—
諸—二水をさき—
病をぬけ—
竹田法平—
相—
法平—
と云ふ—
○ 醫者の豆の病を治す—

此バ廢津御うぎ本ハ本ハ兵一なる家在氣將を相
ひらとの初ど何の慮しといひれハ武男志ぶ是を
信せむ何か言遠の理何らんと再び先生は同
事此バ彼ハ云々と同一先生等曰秋去らざる日
後後ハ若驚し何らんと感ふを斜キくありし代
矣此か何か何れ面おく由思つるぞ

○近き年の事何日か土佐の國何の渡とやうに
此より海中よりやさか知の事ハ負ひ重の危の丘
ニ降りしものあり久しく海中ニ沈みしとの見え
上ハ貝殼物を見たりとあり其のを見事をも朱の如き
赤きとの黠くまじし土人何物来りてを弁あするこ
何れは京師の本原家物にかりと吟味し七甲此を

分此兼後弟希に指来りし孝田鎌南御是を忍く
紅軸ありしとて先生みゆ見られしと事なれぬあ
りんと七摺漢おゆ見せられしと事由紅軸を
あらんとソレハ後才蓋を圍の大者へきりし
とて又少きもの鏡を員ハ七上りし危何の事鏡
ハ産産 年と云ふ事附身くありと語りあす
又ある瀆多ハあむむりありと大いなる危を言
らひ奇教んといふをめき踏きしつちを或人画
掛る代物をかり居るく買あすと事酒造ハ
梅右殿といふあむ母不思議何日か保人おま
起る戸を開き事此ハ門口ハ大いなる危の事
十七日員ひくも人み居たりと事この危くも

恩を謝せんと言ふにかくしては又致しりて不可思議の
名のあるある豆のこし土州の谷佐五平と云人子のある
たつ見だてうとうとて守田川平家と物産せると
あり

○血き治の排瘡の宗匠と在叙文家志詳といふ者ありき
其弟は重信下志詳と云く是も排瘡人ありしと云ふこと
まきのたむとてどありしと云はれぬ人といふは秩父の山
奥に材木切出しは故きとある。降る山深く大草
はな岩ありと云ふところありはらひのみ臥居ころを
見掛たれぬ妙人忠孝命を去りてありと云ふは
さうとて二雨をきく。此の山忠孝命の持身
のたみの臥居たるとあるが所わけるるこも

さあすすし顔色あまふむらさきと云ふを吐掛り
と云ふくおつけくまるといふは彼ら家と云ふ
とめた月也とある見も要勢はあててとて
ありて死來とありし由も新妙と云ふし白苦く
重信を病くくわく若く先づ病む病くの間
女煩く病の病は臥しをりしと云ふる
官位の許ありて半死ありて檢校と云ふ
らつたをみと改め見られしと云ふは下は
平の官に大寺あり大流と云ふありし
と云ふし不怪物細きと云ふと物産と
三代間のまきありしと云ふ下は物産と

先生まかれしとく西れし又先年肥後もこう
 のちを鹿を春之角がのしどよまてし一先が為
 死するもありし也まう方始後子諸君の物
 産の大層をあらはる時細川折柄もわうのぢみ
 頼継も折骨を切されしと見られしは既
 名の鹽粒まう折骨をあらはる産統の由り物
 のたきありしと也あし七心しつてぬ物もも
 まう深山の石なるもいつくまゆ候も若ある

○前年八月十月才多色空濛を流粟妙も
 舟の刺舟満風をたあし都下何れををり
 なく高の微細ある灰煙の海面は胸あきう

本島初にえりけりるをさるる面を微塵土
 の灰まうまうまうまうまうまうまうまう
 まうまうまうまうまうまうまうまうまう
 東興島仙郡の地まのえりるまうまうまう
 島つを二三分も満るまうまうまうまうま
 白まのい(白)を覆といわまのまうまうま
 ちまのまうまの例もまうまうまうまうま
 山のまのまのまうまうまうまうまうま
 二十月新まうまう産舟横崎といわゆる山の焼た
 々の大産ありしとく西まの産もまうまうま
 此も二日の灰煙もまのまのまのまのまのま
 人上許儀をまうまうまうまうまの産中まう

此丸の事付ともいふ事ありし事此も其に
其手にく他日の参考と爲す

美十月新の震害の事也中津新所并首尾を
並走下男をたつて其歸りぬと執

一肥後八代小川浦に十月新の泊居し其に能く
七生先を時南の方を勢を留りて夕立震
の如く見ゆ未判方強く震りて其時とく後
不測ありと名寄鳴りて其時其に奇怪し
事と云く 細川後所役人中有園左衛門
と其に能くおれく義の事 彦彦州と云ふ
と新の事元在之義の事 彦彦州と云ふ
佐佐木友 中津新の事 彦彦州と云ふ

横濱より其の事ありし事此も其に七拾式
増し其里より山北半始く此の方震動し火
石飛りて其の事 凡三里山村長官と云く
火海中 大勢の事 湯上り 熱湯の如く能く
其の事 此の事 善左の事 村焼を
此の事 此の事 彦彦州と云ふ
此の事 此の事 彦彦州と云ふ
此の事 此の事 彦彦州と云ふ
此の事 此の事 彦彦州と云ふ

十月
初震初に其の事ありし事此も其に
中津新の事

月新白分二日屋村多与如遠雷聲引切南之方吟
中子子人二高不審之存其其受其後也一者
其歸一十切執列是市施其書其字其而
目以上

十月十八日

或毫僅多倍

進方其山一併一舟以日多許山年其山
薩州山家山山山山山山山山山山山山山山
島上指其山山山山山山山山山山山山山山
山山山山山山山山山山山山山山山山山山

安永己亥十月辛亥朔夜有物如灰自空而降天
色昏濛瀟灑無聲從二更至五更乃息積可半分

許遜書十韻

中夜衆謹噪門街盡而灰墜衣未看濕灑髮忽為眩寧辨
山川色漸知草木哀粘林驚宿鳥鋪徑墜園菜火野博山
好美和台鼎猜陰陽愆六診師相愧三木牛喘且猶議鐘
音在可推梵經陳燒劫歷史教詳災不寐面雜唱向窓待
陽催幸遭秋稼熟翻倒喜心開

檢舊

日本書紀天武天皇白鳳九年六月辛亥灰震 同十四
年三月灰震於信州草木枯焉
續日本後紀仁明天皇美和五年九月甲申從七月至今
月河內參河遠江駿河伊豆甲斐武藏上總美濃飛騨信
濃越前加賀越中播磨紀伊等十六國一一相續云有物

如灰從天而雨、累日不止、但雜似怪異、無有損害、序茲歲
內、道但星豐稔、五穀價賤、老農名此物、云云

年代記明照天皇寬永八年三月十九日灰降如雪

自錄四國史及日本紀畧東鑑等載而灰不可彈記姑

舉一二爾

己亥癸十月

度會光隆單

○昔人の如く、和を多打ち、乃き、凶く、なす。又、三日
伏の暑き日、初敷に遠行の山、海、御撰く人の御
尋来り、者あり、主人、速く挨拶、か、と、を
遠く、ある、か、し、花、想、あり、若く、みな、坐、待、こ、る。
而、主人の、應、對、速、ある、か、し、高、く、逆、高、ある、者、こ、

昔人の子、覺く、ある、を、成、れ、し、む、存、ざ、る、者、あり、人、も
乙、此、れ、こ、の、如、く、な、り、者、多、し、よ、の、あり、又、人の、御、撰、れ、
所、も、此、時、多、く、出、陣、ま、ら、な、い、御、撰、り、や、さ、し、
向、り、ま、り、あり、御、撰、り、ま、ら、な、い、人、も、一、い、
く、ぬ、い、ま、り、あり、又、乙、さ、き、御、撰、り、い、わ、い、ま、り、あり、い、
ま、り、を、御、撰、り、あり、海、也、會、り、ま、り、と、思、ひ、を、あり、ま、り、
善、く、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、
ま、ら、な、い、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、
二、命、の、と、の、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、
命、の、と、の、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、
楚、入、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、
御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、
御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、御、撰、り、あり、

○と南より産業をせんと思ふ者あり居を閑さく
 其端を南より上世よりみまゝに居させしむく短か
 りきりては二月二重なりめん旅のともどもしつゝ
 集めてみせはかべてあまののちありはれしよ
 和す思ひ立ちあす所を上世宿あり復々を七
 毛の毛の上世あり種ふ由時時しむあの上品
 ありと外より居を者あり古序諸系あり居あり
 皆許すし若満りのけりもよのありしとれを
 重みよ利かれよ夫斗みまゝにさむし居疾と
 知れはざりしものも集りあり諸方よの如きは
 りを人の事意古や性もあらし能成みざり
 とのゆか柄さむし居をきあつめのあり

其人若くは此のよとて悪くは初るこら此をれを
 の人これバと七何ゆかゆれありは方々の目の明ぬ
 必法あり早く成丹は目をけしを俯録のよのよ
 へりまをれも其人のむかふる者と見ゆらるれあり
 ゆりては以導眼と云ふてその目つうをれは方々
 子限りを何ありしよ一歩をれは病はるるれを
 満すと思ひしよよりあつてしと和意を中ありと
 と甲ひを意ありと一と栗山の考補生をい
 此

○士君子事と立身をおけんと思ふを激量大
 かり生しとくか来ぬありあいつの路なあり
 せんまの傍侶大塔伽藍を建ませんまの志就

あついで一人世帯御守をなさりしとて世帯を
回侍しく日々布衣を伽藍建立しくと呼りしく
巡行せしありちあらう一二浅きのかたを
くあらぬ立御前を交んとすれは御前か
けのいともめ夫我の水浅をあつめられがと果
のたぐ厚きまもありず多瑣細のいなあ
目を御守に永くして私と旨の意はわたりし
見ぬくとも三糸の百月さけけしきくは
諸人重んずを見あるい毒物深懐あるうとて時
の豪族を思ひあはれ波くはあはれはは
て幼化懸しくはきりて昨日して大境を御
くをうとどふ小庄に右右羅漢の建立を御く

作を一軀

い系統のどりりとのあまあ
のまを指承うくとあひ多るを賣拂くを
あまを大ひあひ佛此三ツをこりり決業の
門のあはれくは右らん建立くと日々呼り
くいつの百まうあはれ物の大業を御あ
中人業を創り三代目住持をこりりとて
あはれくとぞは男路のつあはれまの指あ
とも大切くとまはあはれ物の御あは
くはれに七のま何よりは友是景大は七
まを起されば物の御あはれまの御あ
きたりまはあはれ

此圖也者

判

總見寺殿贈一品大相國公近州安土之熟師有人快開
胸襟下捨片篋傍設蚊帳左持直木右擊鞞篋者也是形
我國之諺於繪事而以教人也取夫知之收聖識之不用
訓誥者矣見者勿以易解忽諸也儻施之於辭則曰其為
丈夫者心體廣胖氣宇高直而內無諂曲外勵家業則終
能保身也繫 相公之意而從著至微之捷徑也所謂脩
身齊家治國平天下之道亦不出乎是矣厥曾孫織田貞
幹臨寫附于山謂曰斯事逸于家譜惟志告旃請作記永
昭將來學書顛末

元祿元歲庚辰十二月穀月

教住法山當寺六世 白龍口識



印

印

印

尾州の寺あり

この國や男もむ事をひかくしそちをこぼる
推すことくま初月さしそ（一）身をつひひ福不
るふくたのうさ女は新すりかせくまにたをの
身をとよむとのさきしあし（一）此を煙ちを國
公也道江の河つちあおおちを一時にすしそち
かあけさきも終ひは後の人々の口とく見くをの
そちの河はをあかんとのさきしあしとそ
はあうをひひの夜をのうまこ徹回真幹の言

初たひうつし終もせそ尾張國清山苗吉の納
め終（一）まきもや男もあまをそとつちり
相國の在（一）まらひひそ今そは家しねるま
世の人すすたあまをひひ終はあまをひひ
たすあつま

○留聲漫筆三編 安永九年庚子

所い十人改ま七粟又を懐愛といわ人きり同後意
田喜八高といひ白人の易めをまきひく娘とあてり
くはは娘去来の妻何つりし病氣身きけりの
日ひくまきりそまを及く死也也きりしは娘

ち切らば一付いやはも己れ才交の病を必死ある
ド一死後其園を自ら先手書る大島達八
庵元(生れ出下)かあうはを方ううとらひ交う
本の如く書者一是あれといひく程なく絶みり
新長の子とらたれとひあううを所引のり中極も
下善治内よその事も引うてまきく印とといふ
の事は何の程得の事あらう己れ死を方時中
我せしとく大島翁生れ事れうそれをあどて
引せられ後をばやいふあるるもやよき事とい
うり并かたを思ふ思儀も思人此意よけ陰
徳の事の中を去らたのまをひやとれといふ止
きり)まう何の程あうくの物もまをれをかくて

権筆かつーまー也あうまも也と八傳をゆゑ大島
翁(善書)此の梅もなやあお生をまうとすうて
男多た其まめを生れ出んといひまう善の善極
まの百も何れをううかひも何うとあうくのう
と大島翁はあひ入まういあを甲)まを極ま
るまうや)まを極まもあうのれとて昂回復士成
依まあ庵の物語)ま)善極のりあう)

○石所紫也山田平を唐といふまのま月ひあ愛せし
馬犬まらう死夫七考)愛、飾、跡備は先て
んも痛くくいりこといけ白折善提まう佛節
を花ひは道心者壽う掛う花ハ幸のりあうと
まのり採このあんま日既愛せしま何れを何

身を^に持^り行^く應^の偶^もありは^に煙^一昆^の田^向まで
ゆいこし^し風^呂波^を渉^る又^と渉^る和^れ左^を兼^ふ
知^りて^し風^呂波^を包^む籠^の傍^を入^るを^も好^むりん^がい^ふ
し^とは^後者^をお^はせ^し路^傍に^て様^々と^も渉^るて^も食^ふ
初^め終^りの^間に^もお^お帰^ると^しわ^かり^きり^う
口^を教^へなく^も志^をお^しり^し中^には^も知^ら
ず^しり^んた^いか^はの^まの^しに^付て^も必^ずと^評議^ま
あ^くあ^りま^さの^かの^まに^おて^れゆ^はる^も食^ふの^ま
し^るに^んま^のの^いぢ^をお^もた^ぬ不^思議^とと^もあ^り
その^一身^の終^る先^祖の^志を^も何^んか^うか^う平^平
と^母者^は兼^ふと^しわ^かり^ぬ知^らぬ^の終^るま^はれ^を平^平

を^高と^れと^あり^けの^まを^終つ^白り^まの^まの^あく
あ^けの^あへ^した^ある^んと^しひ^られ^か神^々者^中
さ^らに^も中^の終^ると^あり^し鳥^のさ^らに^も守^田川^の
平^平と^終る^まは^れ
○ 霍^少言^とい^ふ言^とい^ふ言^とい^ふ言^とい^ふ言^とい^ふ
た^けや^のま^のと^者より^もた^けや^のま^のと^者
た^けや^のま^のと^者の^まの^まの^まの^まの^ま
い^やに^あり^また^けや^のま^のと^者の^まの^まの^まの^ま
の^まの^まの^まの^まの^まの^まの^まの^ま

詠^詠霍^少公^鳥歌^一首^花短^歌歌
翼^之生^卵乃^中爾^霍公^鳥獨^所生^而己^父爾^似而^者不^鳴
己^母爾^似而^者不^鳴宇^能花^乃開^有野^邊後^飛翻^來鳴^令

響橋之花手居左散終日雖喧聞吉帶者將無遐莫去昔
屋戸之花橋爾住度鳥

反歌

檢霧上而零衣手霍公鳥鳴而去成何怪其鳥

弟七母

撰中

那胡の浪を軟漕きあれはうみあう
切あぞ暗

弟十母

おちろを初めのもやうとうあんとしきんたな
後とすみそくあめ

弟十母

さう父をまうくとーりみさる母をまうくとー

わはいもぢいをのよ。いあ白とあめと

鳥名斑鳩

鳥名

弟十九家持音

うつきのたて渡りあまりみあくわをけだむし
まうはうはまうとるうくひすのうりーまこ物と
せ流めりあうれもやの霍公多所生みあす
あひあう又霍公音の母名は萬母家托しく
格音初きあ初るのり本と多程を格あるとの
とあま頃日島山先生真秘東社格の傷を
とをを渡あ社格を多性まあるとのたつと
あしく音の萬は托しく音あるとつと南名
クーク羅向池をうまはたとつと羅向池書や
まうまははたの極はニーンとつと池を地まは

五折のり子愛若山日登くら山女坊主あ(何つ
 南何を飛揚るやと向花を鋤術を好くする
 差刀又亦おとと向刀を柔術をせりといひて中
 此を叙と柔術を初初りんと何うこれをしき
 ちとく土お梅を組居んと男刀才とくせり
 此は風の方平身おきとえく同を正たる日
 芝山や禪古と新うたつ才とさつこと
 初子もさうくわ初の方お見分あし日芝居を
 新西より新川あへ有来うく山をまき其甲斐あ
 何新う何られよ
 ○ 那のえんまやくの引の山のといひを祇園初う
 例より作こんまやくと新くまき作又山とい

○ 乃に九巻のるすに那んまやくと遊方の山を引
 のとくそま日のいを初くまきといひて何う
 此は諸あま由通くといひあ
 ○ 初初棒とつ白といひるあ有老那竹ををといひ
 人あ甲は初くまき絶老は初餅と梅(一の巻の
 くまき)板はあけうんとんのことく初梅をて延ん
 る初いを初くまきといひてしすくもまきをたひ
 也れものひさるを初くまきを初る
 ○ 肥後屋の何初地を水虎あ
 ○ 梅造の初は初色といひ不香煙あ初うし
 その初は初人(一)くまき初何あるすくま
 集や(一)くまき初人(一)くまき初何あるすくま

の家の辨名とあり様出再ひも戻りくも思ひ
 此の如くとも懇望するに先きする事とあり此
 され何れもその買手有きしりて銀に金と
 其方ありて所ありきりて銀に金と
 積りて其面せのひくを方あるに金と持て来り
 され御切とかくめ所ありて此れと都所なり
 其の法きしを不又あるき者ともありし時の
 諸紳衆より中秀徳の容ありて言われり
 存る。百 能は御所なり
 ○ 將軍家の所管に在りたる事なり
 ○ 岩井と在りし 將軍家の所管に在りし所
 ○ 岩井と在りし 將軍家の所管に在りし所

又信す一代に因大納言振井伊家より所具は
 一領敵よりそのまき岩井の事はおとしし敵と
 此大料點表の並にありしありて其の儲りて生
 涯の事者所ありてありて岩井源を唐の同例あり
 幼少何れ代と稱す 事替す此の源を唐とあり
 代々の通あり

○ 泉丹境の所管に 掛物と油と形附といふ
 事重なり久しく秘事のそのありはとて銀と白
 と物也ハその事とてその事ありて銀と白
 と事とて江戸に持来りて 所管 許す
 素人何れは銀と板りて見たりとて秘事
 何れはとて町人毎に京都の度大なりとぬ

子

磐水先生隨筆卷之二

○微桑錄

微桑錄十引

以丹與政者在焉。讀此編而當嗟矣。欲耕王之野者在焉。就此編而當行矣。然有說。今夫水潦溢而見危巢之全。暴風至而知蟻穴之固。天明癸卯之於關東。豈帝水潦暴風乎。希天下之人。牧有感。激于此。是子煥氏之志也。詩曰。迨天之未隕雨。微彼桑土。綢繆。矰戶。孔子曰。為此詩者。其知道乎。得英曰。作此編者。其知道乎。

天明己巳昏二月

東與

勝得英疏之

得英出

字出

徹桑録目次

總説

飢饉騷亂諸説

民情同異並勸戒諸説

慨嘆

荒政

徹桑録

東奥 玄澤大槻茂實子煥父撰

總説

天明三年癸卯初夏乃頃いり霖雨降り^し
 い^し二月三日と雨歇と^も草^わる衣身^も纏^ひいと
 僅^に指^し折^りく^る教^をる^程あり^し草^根の^際より上^つ
 り^しの^園より^も旱^敷の^亦あり^しと^も汝^汰ま^あし^しの^園より
 在^りし^も押^並る^雨の^降り^し絶^ちの^時あり^し地^者あり^しに^水
 去^り月^下旬^{より}一^休に^浅間^山燧^へ上^り若^妻嶽^とい^ふ
 而^も山^間教^十間^の間^に俄^に危^けぬ^け持^の近^在に^綿累^煙
 煙^を上^りし^煙を^衣衣^の分^ちか^く妙^に危^し民^屋
 救^有家^暫時^の間^に救^却し^人馬^の死^亡敷^く至^地の
 亦^有荒^茫の^田畠^教十^万あり^し及^山とい^ふ此^{より}

昔妻川より刀稱川へ押おき水溜りし湯きし在る既牛
馬をかけた男女、何事人といふ物、目もあへられぬ
事よもよと聞くも、花もいと盛あ、あつれあふ事
よも地を震動の響き迫國を勿論奥に於ける諸
國より及び江戸の所府内を七五七の終るを新か
へよりあを可れ迄、かみありとも、竟一ぬたあり
地をさき、くを夜中より、翌八日の目ま、灰のそ
砂土はあめ物りまを震動の如く満地におさる、
あよりくをを才庫よりあり一日二日のか
り、あれと奥羽の地を灰降りあき、
さ加き、よの片葉は霖雨物、片まぬれ、且穀の
実より、竟庫を、を諸民の知、左めわ、
たり、

爰あり、あ、の、の、岩根より、東川の諸玉灰の物
り、あ、の、地、を、あ、と、く、稼作を、破、り、ま、つ、ま、種、
あ、れ、と、も、三、の、の、わ、と、い、く、あ、り、ん、秋、の、獲、り、ぬ、め、
半作、の、も、こ、り、が、也、と、人、の、中、何、り、と、秋、の、仲、程、の、
以、ま、い、り、と、も、兎、角、を、此、や、り、あ、る、日、私、か、く、雨、の、降、り、
勝、り、と、あ、り、り、或、人、喜、ぶ、と、五、穀、の、防、陸、の、日、記、し、
たり、と、あ、り、り、見、る、る、百、十、り、を、枝、陸、の、日、記、し、
あ、り、と、あ、り、り、と、あ、り、り、と、也、三、月、中、旬、初、日、と、聞、
く、一、陸、を、十、日、所、免、の、飲、進、角、力、も、五、穀、の、防、り、
く、也、七、五、益、及、ま、く、その、日、数、は、幾、く、たり、且、つ、り、
十日の枝陸、百、餘、日、の、間、を、あ、り、り、あ、り、り、あ、り、り、
且、穀、不、熟、の、沙、汰、あ、き、や、東、川、の、水、く、り、と、も、仙、臺、南、

新津松の鎮内は、さうしく、飢饉、流亡の民、騒ぐまゝ
ありとく、有るく、大騒動、その端、有るく、あり

飢饉騒亂諸説

西郷より、江戸内、の米穀、騒ひ、あき、吾とあり、右、
三年、お、左、を、
去、年、初、春、の、以、り、
米、の、調、ま、く、
裏、取、者、
戸、在、
住、居、
一、
世、
海、
一、
す、
不、
も、
の、
生、
計、
も、
有、
り、
か、
多、
く、
父、
子、
夫、
婦、
の、
生、
ま、
別、
れ、
す、
り、
の、
多、
く、
或、
は、
生、
ま、
ず、
殺、
ら、
れ、
ば、
け、
り、
少、
く、
に、
加、
は、
り、
の、
橋、
く、
出、
て、
お、
り、
た、
飢、
渴、
の、
あ、
ら、
う、
折、
倒、
れ、
溢、
死、
溺、
死、
す、
り、
の、
多、
く、
又、
猶、
く、
上、
山、
路、
の、
中、
人、
の、
往、
来、
す、
れ、
な、
ら、
ず、
お、
り、
た、
者、
勿、
く、
折、
り、
し、
か、
れ、
人、
あ、
ら、
べ、
し、
彼、
の、
飢、
渴、
は、
せ、
あ、
ら、
う、
百、
惡、
黨、
と、
も、
の、
已、
ぎ、
ま、
や、
追、
ひ、
を、
止、
せ、
し、
切、
等、
す、
り、
の、
多、
く、
一、
く、
一、
正、
れ、
在、
り、
の、
ま、
じ、
自、
ら、
夜

夜、未、乃、通、り、ま、れ、は、あ、ら、う、り、
た、所、く、
有、
る、
盗、
賊、
の、
沙、
汰、
あ、
く、
油、
取、
の、
透、
り、
あ、
ら、
世、
の、
中、
と、
ら、
あ、
ら、
い、
り、
か、
此、
の、
妻、
と、
は、
の、
妻、
へ、
い、
け、
を、
い、
し、
り、
群、
り、
来、
て、
流、
散、
の、
飢、
民、
薦、
々、
と、
か、
か、
物、
の、
是、
が、
者、
と、
あ、
ら、
う、
と、
さ、
め、
ら、
い、
食、
ひ、
を、
中、
の、
日、
本、
橋、
江、
戶、
橋、
の、
先、
橋、
下、
の、
多、
く、
倒、
れ、
臥、
し、
端、
と、
は、
端、
と、
く、
並、
に、
往、
来、
の、
諸、
人、
は、
物、
に、
接、
を、
目、
も、
あ、
ら、
い、
れ、
ぬ、
ら、
う、
と、
あ、
ら、
い、
あ、
ら、
人、
江、
戶、
橋、
の、
上、
に、
並、
居、
り、
り、
民、
と、
救、
へ、
見、
ら、
れ、
貧、
乏、
人、
第、
に、
及、
ぶ、
と、
あ、
ら、
三、
老、
の、
神、
妻、
の、
百、
を、
氣、
い、
と、
嚴、
き、
時、
も、
夜、
も、
電、
の、
邊、
を、
板、
と、
橋、
板、
に、
起、
し、
男、
女、
救、
へ、
見、
ら、
り、
ハ、
と、
折、
ら、
れ、
り、
飢、
寒、
極、
極、
と、
あ、
ら、
う、
と、
自、
憫、
の、
見、
ら、
り、
見、
ら、
う、
と、
思、
ひ、
ま、
る、
と、
あ、
ら、
い、
端、
の、
救、
済、
の、
見、
ら、
り、
は、
お、
ら、
い、
お、
ら、
い

けくちの救への飢民の救は施を施さ力も加し抄録し
竹のく見れば左表の所方。知らねは情懐深き人
のありく白粥桶に入れく持て来たり一人くは源を
與り日めあり或は解毒の薬とくを能死食物を
流ひく煮むりまう又物。飯を待来たりニッ
三ッ種と煮え取りをり見（一）右の物く日く
群り来りる飢民救またり此れはよく奉行なり
余下り所同分の薬を煮る者の在りて一くは改め
地法あることとをの在りて流し家屋を而もさく
かす救を煮るの者を流すあり。乞食は車馬七り小
舟。船り此薬を煮るを煮るなり。市所は給り
所救ひありと聞けり。この所は活きなり。後

ハ餅粒救をくかくありねれよ。泣き来り。煮り又ナ
り。此二の煮さ白粥ハ。又。佐物のうらさの多く且
此のちの食物の商ひ橋。は。路。み。を。商。ひ。店
に。あり。ま。り。ひ。も。ち。あ。つ。き。の。も。ち。り。商。ひ。の。商
ひ。も。ち。あ。れ。は。ち。ち。あ。ん。あ。り。種。々の。食。料。賣。り
く。聲。く。いと。喧。え。さ。り。は。繁。華。の。所。様。々。あり。様。々
未。だ。く。中。か。あり。さ。り。物。様。々。あり。一人。も。武。人。の。着
合。は。し。ぬ。軟。下。あり。き。也。は。い。り。は。刺。し。物。ん。と。只
ま。り。已。ま。り。あり。は。ま。り
分。隊。下。り。の。敵。は。所。觸。下。り。く。所。下。り。は。粥。用。の。あり
く。作。務。は。此。の。後。所。や。戸。毎。は。白。米。粥。を。煮。り
の。粥。所。は。扱。ひ。あり。き。所。は。粥。を。煮。り。由。漢。を。煮。り

納経の北村と兼るを友呼くは、日米の貴きより
片にたたく物々の食料兼納するに過ぎず、麦琉
米の乾糧の如く、食ひ續きたり、農家の小作の
もの存せしむるに、世に呼ぶる、富貴の家は
皆く糧加へるに、稀あり、衣食住は奢り極め
ぬ、都下の風俗ありしゆ、いつかかくは、下つ所ある
ありとも、いかにかし、只米穀のまゝに酒あはせ
り、紙油の乾き存るに、多く糧の貯蔵は、いふ
と、價昂は、倍しぬ、諸民の困窮は、いんご、あし
ぬ、北村も、大なる家より、貧福混雜の一大都府に
此の領地の収納を、諸侯の在、所存するに、
年々その財へ、多しと、呼ぶる、人々、を北村

お身に難苦は、貴く、す、常の如く、酒食を飽き、好むる
而、此の米の價は、貴く、一時の穀を、い、何ぞ、
少く、は、扱、れ、也、は、領地、の、戯場、角、抵、等、の、抱、山、取
り、常、に、庶、人、に、あ、つ、ま、り、通、り、と、聞、き、は、中、に、も、又、上
州、野、州、より、東、奥、色、土、の、諸、士、は、この、村、に、在、り、の、貧、民、は、
飢、を、ま、り、受、く、さ、る、の、あ、り、堂、に、あ、つ、め、乾、糧、は、領、主
に、納、め、給、ひ、給、ひ、を、名、と、し、強、訴、し、お、の、身、に、及、ぶ、と、
大、に、名、を、得、り、日、群、集、り、し、也、この、正、當、の、決、定、を
き、と、し、命、を、失、つ、た、い、こ、ろ、を、あ、れ、は、往、來、の、旅、人、に
刺、さ、り、ん、物、と、せ、し、め、た、也、は、さ、り、す、と、は、日、徒、増、
長、し、と、考、へ、又、は、不、民、家、に、あ、り、る、材、物、具、何
も、あ、り、に、奪、ひ、取、り、物、の、者、ら、に、括、さ、り、し、き、所、也

去るもくは江戸のりし市井味のうら（与力同士の輩は
 さし白けられしうらまき一りこけにせりしを
 あらんと先づくもの多し思ひありおる所片を
 くりく世の擾乱は民の貧窮より蜂起するとき
 を此の式をきよむ遠くぬえ戦闘の事也起らん
 と何れを重し武器勿掛のうらまき（一）おれは
 あらぬ輩を何となく物まわす年終の因まき
 致すは又先づきし常備兵を存せしめし
 の例も例のうらまき持ぎくすのうらまき中にも如し
 諸國の領地をうらまきし諸侯の所もくも
 豊衣衣食の所ありし所ありしはくも如くは綱張させ
 四方をうらまきしと聞（信）る事ありしはくも如くは諸侯の

困危をうらまきし漸くは世をいんたし新来の勢より上る
 の諸國より承の入津ありしはくも如くはゆひみはけり
 よく人のむもやくたせしめありしはくも如くは

民情固異無勸戒諸説

寶曆五年乙亥のやうも去年の種をありぬは奥細
 の地大きは飢饉をうらまきし秋藩の諸君先生との飢民の
 なるべきは深くあつたはみりありし時を臨んて解毒の
 二方が施しある民皆備荒録といふが如く著し郡邑
 の領地を行ひぬらむは其の反都府所の書肆申極堂
 の清くは任せしと存印行とありし世はゆひの
 荒業も買本ありし人ありし又新刊の如くは
 其存ありしと人ありしはくも如くは

焼くは今のきりしわりの此の今友の如き諸國の
凶事は違ふく其の入は少く多價賣れに已まなく常
に用ひざる糧は少く用ひるは脈の如くす
又糧は免る免へうき代はのまの如き此の如き
の膏紙者りざる也なり上りのわりの如き考は此の
今の江戸の食物は地の膏紙は此の如き考は思ふ
なきよありしなり余は此の如き考は思ふ
考へくいとくありしなり余は此の如き考は思ふ
大抵少く考は思ふ日ありしなり余は此の如き考は思ふ
饒有物蓄蓄の地なりしなり余は此の如き考は思ふ
天石の如きしなり余は此の如き考は思ふ
一帯三帯といふ諸國を聞かれしは西洋諸國を都て海

土の西北にあつる若園を以て穀類産する縣にしては
本邦は年々通貨し米の如き所は所産地はも其地其國は
しく麦は此の如き稲は産する所は他の食物はて
生命は全し米を用ひるなり其れありしなり也此れは
むろく世界にかけし補を所ありしなり江戶を
を知るは同一武居の如き西北の方にあつる在り下
此州の田舎物は瘠地多くし稲作全くと生長し
多くし麦は里芋の如き用ひるなり其れありしなり其
東は氣仙郡といふ所の如きなりしなり山畑うり
到くはなりしなり又南郡の山奥は山谷多く
田地絶へりわけにやなりしなり其れありしなり
作り或は何の如きなりしなり其れありしなり其れありしなり

しきん

慨呼

凡天地間の事古来素藉を載せしきき渉しきけり
こ又人の業は聞及ひある事何れも其れにその業は渉
り或はその流に聞くらぬに感も重く嗟すを起す
ありし身は深く微塵をり多し而れも一連し
不見一連しはきりるものありし身は其の程に覺る
まのありし身は觸れし其の程に深き所は銘し
昔日の思ひは其の程に大いに感念するものありし
こ又人の上は老の人はよく世は賢明の君は其れ
うれ和清乃群典に之のうすく下は情に思ひ
やうなる所はありし身は此の程に所はゆふ

海に也後へ北の流り下るるものありし身は
わがめし多しぬる也を此の程に下るる所は其れ
まのありし身は其の程に下るる所は其れ
ひやくもくありし身は其の程に下るる所は其れ
の也昔年ありし身は其の程に下るる所は其れ
を白く見聞し其の程に下るる所は其れ
引更なる流りし身は其の程に下るる所は其れ
思ひやりぬる也余は其の程に下るる所は其れ
寶曆七年の事余は其の程に下るる所は其れ
かれと父母の物語より同族の先師清庵先生撰を
名前の民向備荒録の事ありし身は其の程に下るる所は其れ
諸民凍餓の事ありし身は其の程に下るる所は其れ

八百も馬の馬のつまむらひの
在る皆成み流るれぬおれの子ある十二三の
五廿二の百女のかゝるもまう
三代物種り且れ二親はれ兄子なふれ夫が先
を七家一人生活しう物よのまあしその
流けものさぬ見ゆるはけ流の袖のわく眉の
向りしは又流り田畑のさぬ見度する
る所を成る生れ成れも子一知る荒地を
たる田島少うは香匂く桂竹のるもくさぎら
かく七稲葉すう一葉の生の葉うとる
理をよまは熟したる麦のその作は
めさるも見へうこれ皆葉の眉の細
く日くのはは山狩り尋ねる葉本皮
め飢り養ひ耕作を者うの雌おく又
食するはれせしうかはれハカ
死に人種り生きあひるは
よあめかし自らぬるぬるは
又目もれ肝もぬるあつれ
うしかし群集するは
うのちを智の面より人色と
葉の色なり民有飢食野有
わうめその子ぬ葉の病み
して彼地獄物種り
うつせを
餓鬼亡

く日くのはは山狩り尋ねる葉本皮
め飢り養ひ耕作を者うの雌おく又
食するはれせしうかはれハカ
死に人種り生きあひるは
よあめかし自らぬるぬるは
又目もれ肝もぬるあつれ
うしかし群集するは
うのちを智の面より人色と
葉の色なり民有飢食野有
わうめその子ぬ葉の病み
して彼地獄物種り
うつせを
餓鬼亡

者よらんは似る影を喜ぶにありたるを
ある眼隔と観望者なきありて是に瘦衰い
枯れ枝の如く只腹をうりて上り或文三文の
多くあやしの食物買ひて有りて是の時
に幾度といふ限りをし持念せりありて
二後やく加ます飢民は中々少くも渴さ
飲七の管ひくの飽きしは其の如きとい
あふるは飽食と見ゆ右の如くはけり
あめりける又けりありおれはあり愚民の
也此れ多くありあきあきにして是れは
一すは種を種なきあふ人にありて見
やあふるといふとありてあふるは
くきと有り

はくは何となく物とひきあひてはあり
くはくはは何となく物とひきあひてはあり
製しなり餅とありてはありてはあり
何となくはありてはありてはあり
聖花菜何となくはありてはあり
の民志すはありてはありてはあり
若くはありてはありてはあり
講なりてはありてはありてはあり
知らむとありてはありてはあり
よくの艱苦その用、古所の種くはあり
ひはありてはありてはありてはあり
寛くありてはありてはありてはあり

本穀豊饒の東國もよく斗升の米は
たれも乏しくを乞くも亦得るは
十倍ちりとも也日本諸島の價値
谷もよく金を値はかりたり
花菜をみよく貳拾大を五升も
升もよく北百歩の米といふ程あり也
例しよく寶曆に米は比をれもその
ソノ程も深く嗜すも亦其の秋も
七の婦人月より経り給へども
多てまればなり手飼の犬猫の
所もいづつよく死せ給へども
ソノ程もよくいづつよく餓饉
老人も亦及ま

和所なりとも也亦南都伊賀の地
米一粒も産み給へども餓饉
みは竹倒れたる死人の肉を
此れはよくいづつよく牛馬の肉
お場定り生きた死の差は
三五文といふなりとも也
う左ていづつよく也此れ
此れも亦在り給へども前文
余も若くよくあるなりとも
とも也よくよく茶つのも
一言も此の如く亦是目
の香うひ面白くもいづつよく

河内守正あり 嗚呼一國一郡の至とある人希く
日計救いの備へ公卿軍兵有るにわくあるを如き
は備へるに如く上は蒼らわのくさるる賢く
まじくくも身を親しくその人自らみよあたり
多かりあけれは出の程の事知り多かりあたり
うれすも下ある大夫有るの事も當り時代
行く身よをれあけの法に記す覺えぬ務めくあ
れ計救いの公卿の思ひ分ぬる事あらん悲し
む重たの事し記あり 既に備荒録に載るる而
の流民その真の摸くくまきくくくく京都ま
印刻の事し画工の思ひ分ぬる事しめり字せし
形よりと皮肉増く改め画をたたりこれその

時のありさぬを知らぬ太平鼓腹の人のかたまり
いふかれは初め人月もあると思ひくくくく
余も又やせし初めく飢民のありさる目あり
見指くくく状記書ありあはれさ心肝は銘し備荒
録の書深懐より 汝此のやるんその実撰あり
計懐くはくく濟世の君子余は集計見くその
真あり思ひなり 備荒の良法計工
くんる計書ありその真ありと不真ありと
多し見ると並ち見るとの考より深く公卿め
くらしゆめく 公卿疑ありあはれ詳し世の
激慨呼ぶる 諒くくくく 公卿詳し世の
役の人と信あり 其のあり

荒政

此等事なきまかると艱苦見聞をわくら秋を非り
其年ありとく此れ見お移しす可重地ありむ
時々降んとく野(の)畑食(食)施(施)し粥(粥)を(を)作(作)り
粥(粥)を(を)施(施)すとい(い)とも救(救)十(十)室(室)の流(流)民(民)救(救)ひ(ひ)是(是)を(を)重(重)き(き)に
乃(乃)ゆ(ゆ)あ(あ)ら(ら)む(む)事(事)刻(刻)く(く)此(此)れ(れ)救(救)の(の)術(術)を(を)く(く)ん(ん)に(に)有(有)重(重)き(き)
注(注)此(此)れ(れ)他(他)る(る)あ(あ)る(る)は(は)あ(あ)り(り)に(に)も(も)の(の)國(國)君(君)の(の)兼(兼)心(心)情(情)
用(用)ひ(ひ)お(お)ひ(ひ)く(く)其(其)備(備)河(河)を(を)ま(ま)る(る)ん(ん)秋(秋)凶(凶)な(な)ら(ら)ば(ば)古(古)く(く)一(一)に(に)
救(救)急(急)料(料)の(の)備(備)に(に)ま(ま)り(り)し(し)て(て)必(必)け(け)り(り)薄(薄)土(土)な(な)ら(ら)ば(ば)一(一)に(に)
其(其)備(備)を(を)く(く)荒(荒)政(政)要(要)覧(覧)救(救)荒(荒)本(本)原(原)等(等)の(の)諸(諸)書(書)を(を)此(此)れ(れ)に(に)
年(年)計(計)し(し)く(く)此(此)れ(れ)見(見)る(る)算(算)根(根)木(木)皮(皮)を(を)以(以)て(て)し(し)る(る)一(一)得(得)る(る)須(須)
更(更)の(の)死(死)を(を)緩(緩)め(め)り(り)し(し)て(て)い(い)わ(わ)す(す)と(と)く(く)此(此)れ(れ)一(一)年(年)の(の)善(善)い(い)

み(み)を(を)わ(わ)り(り)し(し)結(結)唐(唐)日(日)和(和)の(の)民(民)と(と)米(米)計(計)常(常)食(食)と(と)し(し)て(て)久(久)く(く)口(口)腹(腹)
を(を)わ(わ)れ(れ)る(る)事(事)此(此)れ(れ)五(五)穀(穀)の(の)外(外)に(に)一(一)決(決)し(し)て(て)生(生)計(計)保(保)ち(ち)
ウ(ウ)ニ(ニ)ウ(ウ)ン(ン)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)あ(あ)ら(ら)う(う)ぬ(ぬ)五(五)穀(穀)計(計)財(財)の(の)積(積)患(患)は(は)備(備)
を(を)り(り)亦(亦)此(此)州(州)を(を)け(け)ん(ん)備(備)荒(荒)録(録)を(を)載(載)す(す)而(而)の(の)備(備)荒(荒)樹(樹)藝(藝)
備(備)荒(荒)儲(儲)蓄(蓄)の(の)二(二)法(法)一(一)箇(箇)の(の)良(良)術(術)を(を)れ(れ)も(も)元(元)懐(懐)の(の)邑(邑)長(長)保(保)向(向)
中(中)く(く)此(此)民(民)の(の)世(世)法(法)を(を)重(重)ん(ん)ず(ず)り(り)公(公)に(に)掛(掛)く(く)而(而)此(此)を(を)見(見)ん(ん)す(す)
元(元)と(と)邑(邑)長(長)保(保)向(向)は(は)擇(擇)り(り)し(し)て(て)其(其)の(の)善(善)の(の)農(農)夫(夫)を(を)り(り)て(て)其(其)に(に)
や(や)利(利)口(口)は(は)見(見)ん(ん)策(策)を(を)重(重)ん(ん)ず(ず)り(り)有(有)り(り)て(て)免(免)れ(れ)る(る)事(事)也(也)
い(い)わ(わ)れ(れ)る(る)年(年)々(々)の(の)収(収)納(納)公(公)け(け)の(の)積(積)貯(貯)計(計)を(を)り(り)て(て)其(其)に(に)あ(あ)つ(つ)め(め)る(る)
と(と)い(い)わ(わ)る(る)事(事)此(此)れ(れ)い(い)つ(つ)と(と)定(定)め(め)ら(ら)る(る)後(後)の(の)荒(荒)弊(弊)を(を)備(備)白(白)
術(術)を(を)重(重)ん(ん)ず(ず)り(り)公(公)に(に)用(用)ひ(ひ)し(し)て(て)い(い)わ(わ)る(る)事(事)有(有)り(り)て(て)其(其)に(に)あ(あ)つ(つ)め(め)る(る)
句(句)く(く)其(其)志(志)の(の)人(人)を(を)り(り)て(て)其(其)に(に)あ(あ)つ(つ)め(め)る(る)事(事)也(也)

すう一邑の衆民愚如の常情を辨
此は服す重き
とら思ひ此し全勝をく瑞正の日本は洗土而此
上下ももは此とめく玉用を公使用をうの舊き風
他あり西洋の諸玉をとりて其地を瘠地也此を
他邦に渡海し交易せりりて其地を瘠地也此を
幸多しといひます開けさるる地は到りて其地を
是れ開をくく此は其の所をともすといひ
風化也とすゆ秋方而ともて其地を豊た
るありてかくの如きは絶くともあり秋此は
不属する海外諸地も田畠とも(き)の地多しときけ
と申されは姑く是き国内もくも端くもは荒蕪の
地多く新田開闢をす重た不ありはと見ゆとれ

さへ多かたを打撻風化を此は五穀種殖
より亦は彼五木樹極く荒蕪の地ありといひ
ありて人居住する所ありて世法を可也多あり
ありて決て愚民思ひりて行を重き事とて荒
すされは地の術而し此れ多くありて田畑
の地より年々多しと米粟類ありて郡邑毎に
儲蓄倉庫を建荒蕪の地ありて其地を
ありて此と申すは長保ありてありて洗き
とて此れはと申すは正の重きありて此の
若國の太古深く公使用を公使目り世法加
くく有国の重きは命とて行し多ありて
より此重くもくも極り也ありて葉色の民見ぬ

己有り一年二年の筆山や凌れさるるを白まじ思
 民の恭懐飽けハ飢飢日甚也暖かれバ甚き飢寒
 こそ致し何れ上も立つ人も又下も存りくもの左理兼
 一なるや可くもて之を豊年の所く有り何れハ此の
 その時の所りきさハお忘れ存ハ何れハ此の
 かく有りたるも何れハ困窮する人かこくは諸般定
 め必由也日七も在る有あくんハ保つあま仁直あん
 かく在らハ中幸もあてりく鉄葉のへりハ此の
 すまじ記す何れハ出れも改めハ何れハ此の
 論す極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 幸のわく所らき何れハ此の極きハ何れハ此の
 する何れハ上りも何れハ此の極きハ何れハ此の

けりも何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 辱く何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 この罪一人の君も存りく何れハ此の極きハ何れハ此の
 何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 國も何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 用適直何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 費も何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 あつても何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の
 何れハ此の極きハ何れハ此の極きハ何れハ此の

不慮は其れ其の勝手まじりもあらず。而も何とせん
あけく多く悲しむるは、世に事ごとくまあり世の
國なまじり人の中や深く思ふく多ひく預め備を
あしめん。諸氏に知るし多し。上層く下民を法守に
たすし仁風錫隣に及ひし。亦た世に封内の一帯山某園一
般の事あるは、氣を多に極む。其れ一年二年の
所故に、所為は、野にまじりたり。一帯中の一領地
の民有難。所故多し。一帯中の一領地。亦た
也。多れ多くは、亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
まの何とせん。深く思ふく。一帯中の一領地。亦た
當若深く思ふく。一帯中の一領地。亦た

浅うり。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
多ひぬ。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
や所領の事多し。一帯中の一領地。亦た
穀多し。一帯中の一領地。亦た
下。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
まじり。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
知人。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
まじり。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
あ。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
あ。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
あ。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
あ。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た
あ。亦た所仁にあらず。一帯中の一領地。亦た

勝り、く加江、悔、土民、く、た、昔の、師、仁、澤、以
仰き、く、く、民、有、性、以、師、模、の、あ、う、う、く、く、限、く、く、
の、事、以、に、付、ひ、く、の、務、く、く、の、師、を、み、ま、り、て、
賛、導、す、日、の、あ、り、く、地、估、く、く、中、若、十、方、右、第、の
大、守、く、く、平、日、國、の、為、め、第、傳、以、書、う、り、く、
師、本、服、は、本、綿、布、ある、洛、の、原、の、務、以、及、わ、あ、り、
君、く、く、の、あ、り、く、在、片、國、務、の、注、紀、も、の、幸、跡、以、考、
々、の、者、人、君、乃、勝、き、く、新、の、勝、き、く、く、く、く、
く、而、臣、下、の、あ、り、納、此、す、下、の、情、く、く、く、く、の、注、故、
の、そ、く、く、く、く、也、第、不、能、あり、と、ハ、ソ、く、く、
す、う、下、り、く、す、く、の、名、を、用、ひ、その、あ、り、る、後、不、能、代、
満、と、名、と、く、く、山、北、城、を、守、り、く、く、く、上、り、く、山、北、

を、物、む、の、あ、り、く、此、バ、云、後、國、は、す、國、家、の、良、者、故、
あり、と、ソ、く、く、の、身、は、入、り、く、く、自、ら、注、在、哀、の、い、う、
る、あ、り、バ、秋、下、り、進、む、の、あ、り、求、の、ん、く、求、云、錄、と、
ソ、の、名、著、者、く、く、三代、海、魏、正、降、唐、宋、元、の、三、の、諫、
諍、議、論、の、諸、名、云、在、く、集、滯、く、く、く、也、人、の、あ、り、
く、く、く、の、名、を、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、也、天下、若、國、の、諸、名、皆、中、の、の、師、位、以、慕、ひ、
望、也、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
の、師、の、存、り、く、他、の、求、む、あ、り、る、あ、り、ト、思、つ、
て、く、く、の、備、荒、儲、蓄、の、務、に、く、く、用、ひ、る、ハ、其、
漸、進、く、く、の、名、を、く、く、く、く、く、民、間、の、名、を、く、く

を備の丑穀毎筆戸毎は何粒かかきしめ年々此
留穀年毎日改め納めし種は何粒の興何所一色
は驚何新を建ばら松のああるは年々福何倍す
そのゆきへうこきしあは右序の良法あるを重し年々
初より退ひて網が法ありは年々成就し渴しと
井を驚する患ひ何危れ志めんる何福ありあ
あり年々年々あらしすも年々章のありの危字は羅
り江戸より興州一蘭すもの疏りす命一凶穀飢饉
のありす目のある見ゆ深く嘆息する
ありれ世の危の人を信へんる何福ありあ
詳は記しす年々この真の何年つたりあ
何年平ひたり人ありは國家の者ありは何福ありあ

白あり年々年々をみく其微を列し其食流が受たりあ
此の時年々あつて飢民飢食とあす所の系根本
皮の良毒を辨しと示すあをそのあはあたれ白
華あるあはれとゆ條く辨するあはあはあはあ
史の救饑已むる何はさるのあはあはあはあ
此ハ偏は國君の兼て何仁を用ひるあはあはあ
何ひあはあ何希の所あり諒するあはあはあはあ
君のあはあ何あはあはあはあはあはあはあはあ
何、穀園言と心するあはあはあはあはあはあはあ

徹桑録 畢

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing slightly faded or less distinct than others. The overall appearance is that of a well-used, possibly archival, document.

